野口芳子著『グリム童話と魔女』

奈　倉　洋　子

グリムのメルヒェンの魔女について書かれた本がこの三年ほどのうちに二冊出版された。1冊目の西村佑子氏の『グリム童話の魔女たち』に続く野口氏のこの著書は，副題に，「魔女裁判とジェンダーの視点から」とあるように，グリム童話と歴史上の魔女狩り，魔女裁判の事例とからめて検討していることが特色となっている。伝承文学であるメルヒェンは一般に，伝説のように史実に基づいたものではなく，民衆の想像力によるものだと言われているが，その中に出てくる魔女は史実と無縁の存在だと言い切ることはできないのではないかと著者が考えたことによるものである。

本書は三部から成り，第Ⅰ部「グリム童話の中の魔女」，第Ⅱ部「現実の歴史の中の魔女」，第Ⅲ部「グリム童話の魔女と魔女狩りの魔女被告」という構成になっている。著者によれば，この著書の目的は，「グリムのメルヒェン集の魔女像を具体的に詳細に調査分析した上で，魔女被告の姿と重ね合わせながら考察する」ことにある。まずはこうした目的に沿って，この本を検討してゆくことにしよう。

第Ⅰ部は，『グリム童話集』の中で魔女 (Hexe) がどのように描かれているのかが検討されている。さらに，「魔女以外で魔術を使う人々」として，「男の魔女」(Hexenmeister)，「女の魔術師」(Zauberin)，「男の魔術師」(Zauberer)，賢女 (weise Frau) などについても取り上げられている。まず，魔女が現れる話が合計 20 話とりあげられ，あらすじの紹介と解釈が記されている。この第Ⅰ部には 140 ページが割かれ，著作全体の半分以上がこの部分に当てられている。しかし，話によって，「魔女たちがどのように描かれているのだろう」という本題からずれて，たとえば登場人物や動物のシンボルの検討にほとんど終始する場合もあり，テーマに向って収斂してゆく緻密さに欠けるうらみがある。例えば KHM1「かえるの王様」に関して言えば，この話では，第 5 版 (1843 年) になってはじめて魔女が登場する。しかも，話の最後の方で，王子が，「自分は悪い魔女の魔法にかかっていた」と言う一箇所にのみ登場する。著者はこうした事実を指摘するに留まり，本書のテーマである魔女との関連で，「魔女」が登場したことでどのように話が変化したのかについては考察されていない。また，蛙が何を象徴しているのか，さまざまなことが考えられるわけだが，著者は，ある一つのイメージ・シンボル事典 (アト・ド・フリース著) の当該項目の中の一例に依拠して，ごく当たり前のことのように蛙をエロスの象徴と決めてしまい，エロスによる誘惑と魔女とを結びつけて論をすすめているのは短絡的にすぎはしないだろうか。とはいえ，所々興味深い叙述も見られる。たとえば，KHM22「なぞなぞ」についての箇所で，「『グリム童話』の中では，毒薬を使って人を殺そうとするのは，

決まって女性である」とし，「その理由を，歴史上実際に裁かれた魔女被疑者の実例に当りながら探ってみよう」というくだりである。野口氏は，「魔術は女性から女性へ伝達される」とみなされていたとし，それは主に家の中で伝えられ，母から娘，孫，姪等へ，あるいは血縁関係がない姑から嫁への伝達もあった，毒薬の製造や使用も女性に集中していた，秘薬（毒薬）を作るのは一種の職人技で，「魔術が技術として認識されており，家計に寄与するという役割も担っていた。主婦と魔女は共通の能力を持つ。煮る，醸造する，保存するなど，料理は変化させるという点で，魔術と似通っている」と述べている。そして，このような脈絡で，毒薬の製造や使用が女性に集中していたと指摘している箇所は，第Ⅰ部では最も啓発的だといってもよいだろう。（ただし，この部分は野口氏の見解というよりは，ほとんどアーレント・シュルテに負うものである。）

著者は，魔女が登場する20話について検討した後，第1章(2)で，グリム童話の魔女についてまとめている。それによれば，グリム童話の魔女は，魔女狩りの犠牲者たちの姿ではなく，古代の魔女信仰の頃の魔女を再現していると主張している。（著者によれば，古代の魔女信仰とは，善と悪を併せもつ魔女への信仰ということらしい。）たしかに，グリムのメルヒェン集の魔女たちは，歴史上の魔女狩りで魔女とされたものとはちがう。その限りでは同意できる。だからといって，それが古代の魔女信仰の頃の魔女だと言えるのだろうか。著者はその根拠として，「『赤い目』，『猫』，『石』など，古代信仰とつながりあるもののみが吟味されて魔女と共に出現している」ことをあげている。だが，「赤い目」，「猫」，「石」だけを根拠にこう言えるのか大いに疑問である。しかも，著者がその根拠の一つにしているバーバラ・ウォーカーの『神話・伝承事典』の記述も，よく読めば，著者が読み取ったものとは違うことが書かれているのである。著者は凶眼信仰（邪眼，赤い目を含む）を，善悪両面をもった古代の女神信仰と結びつけているようだが，バーバラ・ウォーカーによれば，古代エジプト，インドでの凶眼信仰でも，凶眼，邪眼，赤い目はこわい，恐ろしいものとみなされていた。北部インドの農民は畑に黒い壺を吊して，邪眼から穀物を守ると記されている。ここで人々が感じていたこわさ，恐ろしさは，善悪両面を併せもった魔女への畏敬とは異なるものであろう。

さて，野口氏の主な主張点の一つは，グリムの魔女は「それほど悪くはない」ということにある。著者は，「古代の魔女は豊穣の女神で，畏敬の念を持って崇められた。それがキリスト教の導入により異教として迫害され，悪の烙印を押されてしまう。…巫女的存在であった魔女は，次第に「悪い」だけの存在へと変えられていった。グリム童話に登場する魔女はしかしながら，それほど悪くはない。慌て者で悪戯好きで間が抜けていて，よく失敗する。子どもを煮て食べようとするが，一度も成功したことがない」とし，魔女の「悪」は言葉の上だけといえると述べている。他の箇所でも，グリム童話に登場する魔女を，「愚かで，慌て者で，悪戯好きな，むしろユーモラスな存在」だと指摘している。「慌て者で，悪戯好きで，ユーモラスな」などということばを見ていると，現代の創作童話に登場する魔女を思い起してしまう。しかし，グリムのメルヒェン集に，「悪戯好きで，ユーモラスな」魔女など出てくるのだろうか。特に，「おわりに」の結末部にあるように，

グリムのメルヒェン集に登場するHexeを「ただ，言葉のうえで『悪い』とされた気弱で哀れな老婆である」とする主張は，迫害された歴史上の「魔女」への思い入れが強すぎて，客観的なグリムの魔女像とはかけ離れたものになってしまっている。それはさておき，グリムの魔女は「それほど悪くはない」ということについて言えば，たしかに，「悪」が極限まで誇張されたディズニーの魔女像と比べれば，グリムの魔女などそれほど悪くはないといえるのかもしれない。だが，グリム自身，版を改める中で，魔女の悪のイメージを強めていったことも事実なのだ。仮に「グリムの魔女はそれほど悪くはない」というのが事実だとしても，それを指摘するに留めるのではなく，少くとも，グリムはなぜ言葉の上だけでも「悪い」としたのか，しかもなぜ魔女の悪のイメージをグリム自身が強めていったのか，ということとの関連を究明する必要があるだろう。

この他，第Ⅰ部では，「魔女以外で魔術を使う人々」が取り上げられ，その中で，女の魔術師(Zauberin)についても述べられている。グリムのメルヒェン集において，HexeとZauberinは明らかに異なる存在として登場しているのだが，翻訳によっては，両方とも「魔女」，「女魔法使い」などとされていて，混同されていることも少なくない。グリムのメルヒェン集におけるZauberinの性格規定は，Hexeやweise Frauに比べ，案外難しいと思われるのだが，野口氏はいとも簡単に「魔術を使うが，悪くはない女の魔術師」と断定している。だが，別のKHM134「六人の家来」に関する箇所では，「グリム童話では，人物が善人か悪人かどちらかに色分けされている。魔女や魔術師は悪で，主人公は善というわけだ。…女魔術師の悪の度合いが初版より決定版の方がはるかに強調されている…」と述べているのである。明らかに矛盾しているのではないだろうか。もっときちんと検討し，一貫した主張をすべきである。さらに，著者は合計四話に登場するZauberinすべてについて，「母親や母親に限りなく近い存在」であり，「子どもを保護し，よき配偶者に恵まれるよう力を尽くす。…要するに，彼女は不思議な魔力を行使して子どもを守る守護母神的要素を持つ存在と言える」と述べている。この見方には大いなる疑問がある。ここではスペースの関係で，一話だけに限って見てみよう。KHM197「水晶玉」の女魔術師には三人の息子がいる。三人の息子たちは兄弟仲がよかったのだが，母親である女魔術師は息子たちを信用せず，いつか自分の勢力を奪う存在になるのではないかと思い，長男を鷲に，次男を鯨にしてしまう。三男は，自分も兄たちのように母親の手で熊か狼のような猛獣に変えられてしまうのではないかと思い，内緒で逃げ出すのである。こうした女魔術師を，「不思議な魔術を行使して子どもを守る，守護母神的要素を持つ存在」だと，どうして言えるのだろうか。おまけに，この女魔術師の母親としての教育方針を卓抜なものとして評価し，「三人が争わず，協力して幸せになるには，一人を中心にまとまり，他の二人は脇役に徹するという鉄則を遵守させたからこそ」末の息子は法外な幸運を手に入れたとしている。野口氏は，末の息子を女魔術師が意図的に人間のままにしておいたような解釈をしているが，どこからそのようなことが言えるのだろうか。末の息子は自力で母親の魔術から逃れたからこそ人間に留まることができたのである。

このような恣意的判断は随所に見られるが，ここではこの位に止めておく。

第II部　現実の歴史の中の魔女：第II部は「歴史的コンテキストの中で魔女を把握しよう」という試みで，著作全体の四分の一の分量にすぎないにもかかわらず，凝縮された内容になっているため，この本の中では，最も印象に残る。第II部の第1章「古代の魔女信仰」，第2章「近世の『新しい魔女』」は上山安敏著『魔女とキリスト教』(人文書院，1993年)，上山安敏，牟田和男著『魔女狩りと悪魔学』(人文書院，1997年)をはじめとする歴史分野の専門的研究者の著作に，第3章「魔女狩りの犠牲者」と第4章「害悪魔術を使う魔女」はアーレント・シュルテの著書などにほとんど依拠して論を組み立てている。従って，最近の学問的成果の一部をほとんどそのまま取り入れているが故に，他の部分に比して，この部分が最も密度の高いものになっているという印象を受けるのだろうか。アーレント・シュルテの書によりながら，牛乳魔女，天候魔女，性愛魔術など，害悪魔術を使う魔女の類別，紹介をしていることなども，おそらく読む者には新鮮に映るだろう。本書は，そういう紹介者としての意義はあると思われる。

ちなみに，魔女狩りと魔女裁判の事例研究は，ドイツにおいて，歴史学の分野を中心に近年さかんに行なわれてきており，現在では一定の研究蓄積がある。ドイツにおける魔女狩りと魔女裁判の最近の研究は，時代や地域を限定して徹底的に調査したものがほとんどである。印刷された当時の資料がほとんどないため，時代と地域を限って，手書きの資料を独力で掘り起さなければならないので，それは非常に時間のかかる作業なのであり，野口氏が歴史上の魔女狩りの事例，解釈，叙述のほとんどをそこから採っているアーレント・シュルテ(Ahrendt-Schulte)の『近世初期のホルン市における魔女狩りの犠牲者についての研究』[Zauberinnen in der Stadt Horn (1554-1603)] にしても，アーレント・シュルテが自らの手と足と汗をもって十年以上の歳月をかけて完成したものである。ところで，魔女裁判において，なぜもっぱら女性が告発されたのかという問題は，魔女研究において未解決の問題の一つとみなされていて，アーレント・シュルテによれば，「それへの取組みはまだ不十分な状況にある」。近年，主として女性研究者たちがこうした視点から実証的な事例研究を行なってきており，アーレント・シュルテの研究も，こうした流れの中に位置づけられる。彼女は，「食物の調理，保存の際に使われる技術である煮沸，醸造，発酵は，魔術的物質を作り出す際に使われる技術と同じものだった」とし，料理，掃除，菜園，子供や病人の世話など，女性が担っていた領域内では，薬草を扱ったり，害虫の駆除のためなどに毒を使用したりする必要があったので，女性の仕事領域そのものが害悪魔術の源とみなされたとする見解を述べている。また，彼女は，女性は主として家族用にビールやバターなどを造っていたが，その生産技術が向上し，技術の細やかさで男性の職人を凌ぐ者も現われ，その製品が市場でも売られるようになると，男性の職人は女性を競争から締め出そうとした。そのため，「女性が造ったビールは魔術で毒を入れているから，飲むと病気になったり，死んだりするという告発がなされたのだ」(以上，アーレント・シュルテ前掲書)とする見解を，ハイデ・ヴンダーの説を引きながら展開していて，非常に興味深い。こうした部分を含め，野口氏の著書の魔女狩りの事例，解釈など，主要な部分はほとんどアーレント・シュルテの著書に依拠している。したがって，もっぱら16世紀半

ばから17世紀初頭にかけてのホルン市の魔女迫害の事例が取り上げられているのである。しかし，魔女迫害は地域によって差があり，また，時代によっても違いがあるだろう。少なくとも，ホルン市の魔女迫害は，他の地域と比べてどのような特徴があるのか位は，他の地域の実情と比較しつつ正確に把握した上で事に当たるべきであろう。野口氏のこの著書は，歴史上の魔女迫害，魔女裁判とグリム童話をからめて検討していることを最大の特色としているのだから，それは不可欠の前提だと思われる。

第III部「グリム童話の魔女と魔女狩りの魔女被告」：ここでは，グリム童話の魔女と歴史上の魔女狩りの魔女被告との関連が述べられている。この第III部，および「おわりに」は，興味を惹く語や表現，思いつきが所々に散りばめられてはいるのだが，各々が深く掘り下げられず，論証のない断定が続く。たとえばそれは，本書の最後に置かれた「おわりに」の核心となる部分での叙述に端的に見られる。著者は，魔女裁判で害悪魔術とされた敷居魔術は，民衆が村落共同体の中で伝えてきたもので，本来は治癒魔術であったとし，そこにはキリスト教的世界観とは別の善悪両面をもつ豊饒の神々の世界があったとしている。その点までは首肯できる。しかし，本書のテーマであるグリム童話の魔女像の結論らしきものの核心ともいうべき次にあげる部分は，なかなか理解しがたいものである。

「グリム童話では白と黒，善と悪の善悪二元論的表現がグリム兄弟によって強調されている。魔女に関してもそうだ。同じ魔術を使っても，人々のためになる良い魔術を使う女性を『賢女』，害悪をもたらす魔術を使う女性を『魔女』として，言葉の上の使い分けをしている。しかし，その『悪い魔女』も，実際はたいして悪くはない。…魔女の悪行は主として変身魔術だ。…牛乳魔術や性愛魔術，天候魔術や病気魔術は魔女裁判でその存在が信じられていたが，変身魔術だけは妄想だとみなされていた。しかし，グリム童話は逆に変身魔術だけを強調する。…彼（ヤーコプ・グリム）は魔女像から近世の魔女裁判における被告人のイメージ（牛乳魔女，天候魔女など）を敢えて消し，古代の豊饒の神に近い魔女像を混入しようとしたと思われる。その際，彼は本来，善悪両面を持つ魔女像を，善悪二元論に基づいて分割し，善い魔女を「賢女」，悪い魔女を「魔女」として二分したのだ。後から分けた言葉の上での分割であるから，魔女をいくら「悪い」と強調しても，迫力にも説得力にも欠けてしまう。」

ヤーコプ・グリムが混入したと著者が述べる「古代の豊饒の神に近い魔女像」とは具体的にどのようなものなのか，読む者に確かな形では伝わらないが，恐らく善悪両面を持つ魔女像ということなのだろう。だが，なぜ，「古代の豊饒の神に近い魔女像」そのままではなく，「善悪二元論に基づいて分割」したのか，また，なぜそうする必要があったのかなどについて，十分説得力のある説明がなされぬまま断定されてしまっているのである。

魔女裁判一つとっても，非常に大きなテーマであるのに，その上，グリム童話の魔女とそれとをからませて考察するという，大変魅力的ではあるが，難しいテーマに挑戦したわけであるが，結論を含め，掘り下げや論証が必要な箇所，未整理な箇所が少なくない。地道な後続の研究を期待したい。

最後に，全体を読んで気になったことを記しておきたい。他人の説に依拠して述べてい

るのに，あたかも自説であるかのように読める箇所が随所に見られる。これは，後に部分的に注記するだけで，引用の部分が本文中に明示されていないことによる。意図的にそのような書き方をしたのではないかも知れないが，他人の説か自分の説かまぎらわしいような記述は，研究者として慎むべきであろう。